

六二

口すると其の傍から税所篤といふ方が「臥す龍の岡邊の雪の光にも優れる花のさくら井の里」といふ歌を献上になりました

口陛下は御機嫌よろしい御顔色で其の談と歌とを御納めになり大層其の直言を御褒めになつたと申すことで血に染みし勳章

口英國の皇帝陛下から先帝陛下へ、ガーター勳章を御

六三

贈りになつた時の事です

口此の勳章は英國皇帝が最御親しい方へ御贈進になるもので、普通の勳章とは違つて胸にかけるものや、肩にかけるもの、他にマントのやうに背を捲くものや、別に足に捲くものまであります

口其時御名代として、マーサー、オブ、コンノート殿下が其の勳章を持つて御越しになり御贈進の式など非常に立派でした

六四

□ 偕さて、いよくコンノート親王殿下しんおうでんかが先帝陛下せんていせいの御おん前まへへ御出おでましになつて、其その勳章くんせうをお足あしに御捲おまきつけ申まをして居をられるうちに、殿下でんかの御手おてからタラタラと血ちが流ながれました、多分たぶん勳章くんせうの「ダイヤモンド」か金物かなもので指ゆびを御切おきり遊あそばしたものと見みえます

□ 何分なにぶん此このやうな場合あひに血ちが流ながれるのは大變たいへん不吉ふきつで、若もし夫それが知しれたら大騒おほさわぎになるのですが

□ 陛下せいは少すこしも御氣おきがつかぬ御顔おほつきで、無事ぶじに儀式ぎしき

を濟すまされました、のでコンノート殿下でんかも首尾しゆびよく御おん役やくが勤つとまつた譯わけで御座ございます

□ 陛下せいは其その後血ごちのついた勳章くんせうの紐ひもを御側おそばの方かたへ御見おみせになつて此この時ときは實じつにコンノート殿下でんかが氣きの毒どくであつたと御話お話しになつたさうで御座ございます

深ふかき御同情ごどうじやう

□ 明治めいし二十七八年ねんの日清戦争にっしんせんそうのとき、廣島ひろしまに大本營だいはんえいを置おいて、陛下せいは遙はるゝ御出おでましになつて居ゐました

「もちやうど寒い時分のことでした、陛下は「ストーブ」や火鉢をお近づけになりませんか、御側の方が御心配になりまして、どうか、炭火の火鉢でも責めては御ちかへ置かせて頂きたいと申し上げました

口すると、陛下は御容を正させられまして、左様なこ



とを申してはならぬ、朕の忠義な兵隊等は、今満州の寒い所で雪中に埋もれながら戦争をして居るではないか、此んな家のうちに居て、寒い何んのと申すべきときではない、と仰せられました、如何にしても火を近づけさせられなかつたので、皆々御同情の深いのに忝け涙を濺ひたと申します

朕に辭職なし  
口或る年、内閣總理大臣桂太郎が、曾て健康勝れずと

の理由で、重大な此の職務を勤めますることは出来ませんによつて辭職が致したいと申し出でました

六八

□陛下は、只今其のやうなことをしては宜しくないから是非思ひ止まるやうと段々に御言葉が御座いましたけれども、太郎は譯を盡して辭職を願ふたのであります

□と、陛下は容を正させながら、お前は辭職でことが済むと思ふが朕の身には何時まで経つても辭職がない

夫れを何うするかと仰せになりましたので、太郎も恐れ入つて、強いて勤めを續けましたが

□たゞ一言の御うちにも、臣下のものが兎角無責任に遁れやうとするのを御誠めになつた深い御意が十分に現はれて居るでは御座いませんか

陛下の御明識

□何事にも御知識に富ませられた先帝陛下の御事で御座いますヨモ是までに御達識とは恐れながら存じ及

六九

す  
ばぬことであつたと井上侯が感心した御話が御座いま

七〇

□それは餘ほど以前のことですが、或時陛下が井上侯の邸へ行幸を賜はるといふことになつた

□まことに井上家に取つて一代の名譽だと申すので、

善美を盡して御待ち受けの用意を致しました

□中にも御便殿として準備してある御一間の床に掛け  
た二幅對の軸は井上侯秘藏のもので柳營文庫から讚岐

の松平家へ行つてあつた東名物と評判のある牧溪の筆

で御座います

□畫は一方が蕪菁、一方が胡蘿蔔で餘程の珍品だとは申しながらチヨド目には詰まらぬやうにも見えるのでした

に御立ちになつて、御感心の体で御座いましたが、な



七一

かく御動きになりません

□のみならず終には御座へ取り寄せて再び御熟覽の上  
實に見ごとな繪ちやと御讚めになりました

□そして、還幸の節に、モ一度持ち参つて見せよ、と  
難有い御意が御座いましたので、井上侯は其の御眼識  
に驚き且つ喜びながら、ト一々御前へ献上いたしました  
したさうです (完)

日月と光を比べることの出来る明治天皇陛下の美し

御逸話は、數限りも御座いませませんが、一まづ之を以  
て御仕舞ひといたします

遺通先帝御一代記 終

大正元年十月十日印刷  
大正元年十月十五日發行

不許複製

著者

橋詰良一

編輯者兼

大阪市南區鰻谷東之町三七ノ七號

印刷者

塚原氷湖

大阪市東區南農人町貳丁目四番地  
大原一雄

發行所

大阪市南區鰻谷東之町  
亞鉛凸版製造所

塚原氷湖

發賣元

大阪市南區松屋町末吉橋北入

榎本書店

270  
533



終

